

# 関東良陵だより

令和七年十一月発行  
(第六十号)

## 「あれから60年のつどい」に参加 押田茂實（昭和42年卒）

本年7月に「1965（昭和40）年・東北大学自治侵害事件Ⅱ」あれから60年のつどい』の案内が突然に届きました。この事件は、文学部出身の総長が強引に農学部への八木山移転を決定しようとし、反対する学生幹部3人が傷害の疑いで逮捕（その後無罪確定）されたのに対して異議申し立ての全学のストライキが起こったものです。結局、総長は辞任し、後任に医学部から本川弘一総長誕生（世界で最初に脳波を記録した生理学教授）となり、一人の学生処分者も出ませんでした。小生はこの当時学生会委員長でした。関係者は80歳を超えています。これには参加するしかないと思われました。

9月14日（日）午後1時に、片平北門会館ホールに到着すると会場には60名を超える関係者が集まっております。知人としては村口至君（1967年卒、元坂病院院長）と奥様（1970年卒、産婦人科）のみでしたが、弁護士や多数の関係者と挨拶を交わしました。

記録の要旨は以下の通りです。「北海道旅行中、他学部の学生会幹部3名が逮捕されたとの連絡を受け、急ぎ帰仙。仙台北警察署へ約100名で抗議に行く」と、警察官150名により背広を破られる。翌日200名で再抗議するも警察官300名、さらに500名で抗議して勝利し、翌日には1000名で圧倒した。当時5年生で最上級生だったため、他学部幹部らも指示に従った。総長辞職問題を巡り医学部構内で臨時評議員会が開かれ、2000名の学生が会場を包囲。学生担当の石田名香雄教授（細菌学、後に総長）との連絡を通じて小用のためのバケツや弁当を届けた。深夜、総長辞職が決まり封鎖を解除した。翌日片平町で開催の評議員会には全学生6000人中4500名が集結し、小生の呼びかけが大きな動員力を発揮した。」

「60年のつどい」では、たくさんの挨拶や思い出スピーチの最後に、閉会の挨拶と「赤とんぼ」の指揮を依頼されました。当時、約4500名の学生を一体化するために、「赤とんぼ」の4部合唱を小生（教養部有朋寮で「童謡を歌う会」に所属）が指揮したことを思い出してくれていました。4番までしっかり歌って会が終了し、全員で記念写真撮影後、村口夫妻と食事をして帰京しました。



## 関東良陵同窓会総会・懇親会報告 関東良陵同窓会会長 飯野正光（昭和51年卒）

7月19日（土）4時半より、東京丸の内外国特派員協会の会場で2025年度関東良陵同窓会総会が開催されました。32名の先生方にご参加をいただきました。議事では事業報告と会計報告、そして2年任期の会長の再任が承認されました。

引き続き講演会が開催されました。副会長の深津玲子先生の座長で行われた国立国際医療センター・総合感染症科・早川佳代子先生（2001年卒）の講演では、「感染症科医の日常」と題して、コロナウイルス流行などで一段と注目されるようになった感染症科の診療の様子や国際連携についてお話いただきました。また、新たな感染症治療法について話題提供していただき、特定の病原細菌に対して選択的にファージを感染させて溶菌するという興味深い治療法の最新情報についてご紹介していただきました。

続いて、監事・金子公一先生の座長により、現在日本胸科外科学会理事長を務められている獨協医科大学教授・千田雅之先生（1986年卒）の「呼吸器外科手術の40年」と題する講演をお聞きしました。千田先生が外科医としてス

タートした頃の結核に対する肺切除の大掛かりな手術から最近の内視鏡手術までの目覚ましい進展に関するお話を伺いました。また、肺がんの手術はもろんのこと、肺移植の少ない認可病院として好成绩を収めていることなどをお話しいただきました。

最先端の臨床及び研究の現状に触れた後は、懇親会場へ移動し、荒井他嘉司先生（1961年卒）の乾杯の音頭を皮切りにさらに懇親を深めました。席次は、受付で引いた番号によって決まるので、誰と隣り合う席になるかその場に行かないと分からないのも楽しみの一つです。外国特派員協会の美味しい料理とワインなどをいただきながら、同じテーブルの人たちと懐かしい話、思いがけない話に大いに花が咲いたところで、全員が番号順にスピーチを行い、近況等について紹介しました。参加者の卒業年には50年の幅があり、様々な年代の方々の活躍の様子を聞くのは同窓会ならではの楽しみです。

全員のスピーチが終わり、デザートを楽しんだ後には、集合写真を撮影して閉会となりました。閉会後も話の輪がこちらこちらにできて話が尽きず、あつという間に時間が過ぎた楽しい夜でした。なお、来年の総会・懇親会は2026年7月4日（土）に同じ会場で開催することにしておりますので、どうぞご予定ください。



※本年度会費を未納の方は年会費五千元を同封の振込み用紙により、ご納入をお願い致します。同封した用紙の使用でATMからの振込料は無料。現金での振込料は手数料百十円となります。（会計担当幹事）

東北大学良陵同窓会  
関東連合会 東京支部  
〒121-0831  
東京都足立区舎人3-11-26 EPS  
株式会社 同窓会事務局  
TEL：0120-10-9899  
（内線172）  
FAX：0120-10-9184

略歴  
1941年  
埼玉県立熊谷高校卒業  
1967年  
東北大学医学部卒業  
法医学助手・助教授  
1985年  
日本大学医学部教授  
2008年  
日本大学名誉教授  
神楽坂法医学研究所長  
2012年～2021年  
関東良陵同窓会会長

## 幹事紹介

児童精神科医として

金生由紀子 (昭和59年卒)



昭和59年卒の金生由紀子と申しま

す。江の島近くの温暖な土地で育って、仙台の街とそこでの学生生活はすばらしいが寒さがこたえると感じて、卒業

は関東に戻って東大病院精神神経科で研修を開始しました。当時の精神科には学園紛争の名残があり、東北大も落ち着かない状況との情報が流れていたもので、それなら実家の近くで研修しようと考えた面もあります。ところが、さすが東大と言うべきか、東北大を上回る大変な状況でしたが、同時に、不正常的な状況だからこそか、当時としては画期的な自閉症児の発達評価やそれに応じた療育の研究と実践を行っているユニークな部門があり、その活動にかかわるようになりました。

## 略歴

1984年(昭和59年) 東北大学医学部卒業  
東大病院精神神経科入局  
1991-2001年 東大病院精神神経科・助手  
その間、1999-2001年にYale Child Study Centerで研究  
2002-2005年 北里大学大学院医療系研究科医療人間科学群発達精神医学・助教授  
2006-2010年 東大病院こころの発達診療部・特任助教授(特任准教授)  
2010-2025年 東京大学大学院医学系研究科こころの発達医学分野・准教授  
2012-2025年 東大病院こころの発達診療部・部長を兼任  
2025年 全国療育相談センター・センター長

## 幹事紹介

ご挨拶はごいじ

好奇心に導かれ産官学へ

坂中千恵 (昭和62年卒)



1987年卒業の坂中千恵と申します。この度、関東東良陵会同窓会幹事を拝命いたしました。

私は、東北大卒業後仙台を離れ、大

か還元できることがあれば幸いです。皆様との交流を楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## リレーエッセー

道なりに

浅尾啓子 (平成5年卒)



略歴  
1987年 東北大学医学部卒業  
1987-1989年 日本赤十字社医療センター内科研修医  
1989-1993年 東京大学大学院医学系研究科博士課程  
1989-1995年 東京大学大学院医学系研究科学振研究員  
1995-1999年 University of San Francisco, California, School of Medicine研究員  
1999-2002年 Chiron Corporation(CA, USA)研究員

2002-2012年 Genentech Inc. (CA, USA) 研究員  
2012年 東京大学医学部附属病院早期・探索開発推進室 特任講師  
2012-2016年 独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA) 特任職員  
2016-2019年 東京大学医学部附属病院 准教授、臨床研究支援センター 副センター長、P1ユニット長  
2019-2023年 バイエル薬品 Head of Clinical Oncology Development  
2023 現在 株式会社CURED

みなさん、こんにちは。1993年卒の浅尾啓子と申します。東北大学卒業後、都内の病院で初期研修を経て、東京慈恵会医科大学に入局しました。学生時代に公衆衛生への関心を持って来たこともあり、卒業すぐの時期に糖尿病の疫学研究に携わったことが、その後のキャリアの原点になりました。当時、疫学は地味な分野でしたが、幸運にも国際共同研究に関わる機会を得て、北欧や米国の実務的な研究体制を肌で感じる事ができました。現場の医療とはまた違い、データを通して社会全体を俯瞰する疫学にさらに深く関わりたいと思いました。そして、米国の大学院でインターネットを介した公衆衛生修士課程を終え、渡米し博士号を取得。米国で臨床研修に戻り、内科レジデンシーを経て内分泌フェロシップに進みました。言葉や文化、医

療システムの違いに戸惑うことも多々ありましたが、熱意ある仲間や環境に恵まれたことは貴重な経験でした。その後、米国で予防医学の教職に就き、また、その頃、新しいテーマとして味覚・嗅覚と疾患との関連の研究に取り組みました。しかし研究費獲得は容易でなく、次のステップを考えていた頃、日本の製薬企業から声を掛けていただきました。長い海外生活に区切りをつけ、15年ぶりに帰国することになりました。製薬企業での会社員生活には馴染めないだろうと思っていたのですが、意外にもすぐ順応し、メディカル・アドバイザーとして医薬品の適正使用に関わりました。その後、別の製薬企業に移り、疫学部門の立ち上げを経験しました。リアルワールドデータ活用の機運が高まる中、自分の専門性を再び活かせる場を得たことは大きな喜びでした。企業という枠組みで、アカデミアや臨床現場とは異なる角度から医療に貢献することの面白さにも気づきました。

その後、関連企業でさらに経験を積み、2024年、疫学とリアルワールドデータを軸にしたコンサルティング会社を立ち上げました。起業は想定外でしたが、今では自然な流れだったと感じています。最近では、産業界の立場から、国際学会の運営にも参画し、アカデミアや行政との橋渡しとしての役割も意識するようになりました。立場や分野を超えた連携の大切さを改め

略歴  
1993年 東北大学医学部卒業、都内で初期研修  
1995年 東京慈恵会医科大学第3内科入局  
2001-2016年 米国にて大学院・臨床・研究(ジョンス・ホプキンス大学、ルイジアナ州立大学、ミシガン大学、テネシー州立大学)  
2016-2024年 外資系製薬企業等に勤務  
2024年 株式会社カッパ・メディカル創立

のですが、人生のいろいろな局面で多くの東北大出身の先生方と交差し、多くを学び、影響を受け、かつお世話にもなってきたと思い返しています。また、米国にいるときに、多発性硬化症疑いと言われて知り合いから紹介され、相談に伺ったUCSFの眼科教授に、「東北大の出身ですか。良い大学ですね。Vogl-Koyanagi-Harada病は知っていますね。そのDr.柳の大学ですわ。」などとお話していただいたときのことをふと懐かしく思い出しました。

臨床医になるものと思って医学部を卒業したものの、次々と新しい興味が湧いてきて、さてそうなるかどうか好奇心の赴くままに動いてしまうようです。広島生まれ松江育ちの私が、全く縁もゆかりもない仙台の大学に行くことになったのも、東北という土地に対する興味の表れだったかもしれないですね。その後縁あって米国のバイオテック企業に就職することとなり、そこから、規制当局での薬事やアカデミアでの臨床研究、製薬企業での臨床開発を経て現在まで、「Bech-to-Bedside」の実現を夢見しています。数年前からベンチャー企業に参画し、また違った側面から創薬に関わることになり、多くを学ぶ新鮮な毎日となっています。最近関東東良陵会同窓会に参加させていただくようになり、様々な経験を持ってもらえる諸先輩方、後輩の方々のお話も大変興味深く、更に刺激を受けています。私もまた経験を活かして

て実感しています。

卒業後の30年余りを振り返ると、四苦八苦の連続でしたが、大変だったことは忘れてしまい、結果として楽しく充実した日々を過ごしてきたと感じます。この間、世界のいろいろな場所でも、同窓の先生方にお目にかかることもあり、それもまた楽しいことの一つでもありました。予想外の展開も多く、若いころには想像もしなかったキャリアパスになっていますが、これからも、新しい挑戦を恐れず、楽しんで歩んでいきたいと思っています。